

平成23年7月23日（土曜日）

陸前高田市災害レポート③

福岡市立こども病院・感染症センター 高橋 宗康
(派遣先：岩手県立高田病院)

高田病院の震災当日の状況をレポートします。3月11日に東日本をマグニチュード9.0の地震が襲いました。その直後に押し寄せた津波により、市街地の民家3,600戸が流失または全壊しました。陸前高田市の中心部に位置していた高田病院も、地震による直接的な被害と、その後に襲ってきた津波により、4階建ての病院の4階まで浸水し、病院機能は完全に失われました。

当初、津波に関する情報が入って来ず、高田病院の関係者が津波来襲を知ったのは、テレビやラジオ、無線放送ではなく、自らの目による「目視」だったとのこと。小児科医師は、真っ黒い津波がやってくるのを見て、患者やスタッフを屋上へ避難させましたが、津波に追いかけるようにして階段を登り、気がついたら1階から4階まで登っていたとのこと。



津波の来襲（高田病院屋上より）

院長の話です。「地震発生直後は津波の情報はなかなか入らなかった。津波の情報が入り、3階に救護所を設置したが津波が迫ってきた。3階もダメかも知れない！と屋上に避難するように指示した後、津波が4階まで入ってきて、大人の首近くの高さまで達した。津波が引いた時点で、患者51人のうち12人が何らかの理由で死亡、職員にも犠牲者がでた。残った患者39人、職員74人、一般の避難者60人は、屋上の機械室など外気を遮断できる場所に移って救助を待った。夜を明かす間にさらに3人の患者が亡くなった。ヘリが来たのは翌日の午後だった。スタッフも患者とともに避難所に運ばれ、そのまま診療を始めた。患者は12日から診療所を訪れ（100人ほど）、流失した薬剤を求められた。スタッフがワーファリンなどの緊急に必要な薬剤を倒壊を免れた病院から調達した。また、訪問診療も開始したが、ガソリン不足には悩まされた。」

津波襲来後の屋上で明かした一晩は、気温が低下し、大変寒く、使えるゴミ袋に穴を開け、それを頭から被り寒さに対処したとのこと。病院の屋上は満員で、交代で座位を取ったそうです。人工呼吸器を装着していた患者には、看護師と研修医が一晩中交代で、手押しで酸素を送るバッグを押し続け、院長は、「眠るな！」と叱咤されていたそうです。



翌日の陸前高田市
(病院屋上から)

看護師の話です。「地震は立ってられないほどだった。その日は非番だったため、すぐに子供を避難させようと小学校へ急行、親戚のいる高台まで子どもを送り届けた後に病院へ行く予定であった。出発しようとしたところ、子どもがいつも以上にぐずるため、出発が遅れた。陸前高田市街に入る前に津波が来襲、難を逃れた。避難が遅れても、少し早く病院に戻っていても津波にのまれたはず。」



病院屋上にて

私は、なるだけ津波の話を書くようにしています。診療中は患者さんから、その合間に医療スタッフから。誰にとっても壮絶な瞬間でした。被災地と安全な日常のギャップ、聴取し追体験することが被災を体験しなかった私には必要なのではないかと思っただけのことです。